

みの ぜ い せき  
箕 瀬 遺 跡

2002年3月

長野県飯田市教育委員会

みの ぜ い せき  
箕 瀬 遺 跡

2002年3月

長野県飯田市教育委員会



# 序

箕瀬遺跡は飯田市街地南西側に位置し、南側に松川を見下ろす高台に位置しております。

北側に広がる市街地は、近世において飯田城を居城とする飯田藩1万石の城下町から発展したものであり、昭和22年の飯田市大火で市街地の大半を焼失したとはいえ、整然と区割りされた町並みの様子は往時を偲ばせる城下町の面影を残しています。

市街地周辺は大火によって多くの文化財が失われ、城下町以前の姿は断片的に把握されているのみですが、旧石器時代以来連綿とした人々の営みがあったことがうかがえます。箕瀬遺跡は市街地の中にあって住宅などが密集しており、これまで本格的な調査が行われていませんでした。その為遺跡については不明な点が多かったのですが、今回縄文時代、平安時代の住居址が確認され、近世以前の古い時代から人々が生活していた事がわかってきました。これらは私達の地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のまま後世に伝えることが私たちの責務でありましょう。しかし、現実社会に生きる人間としてよりよい社会生活を求めていく権利も尊重しなければならない一面もあり、日常生活の中で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面する事が多くなっています。それ故、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることもやむを得ないことといえましょう。

文化財の保護と活用は、文化財行政の大きな課題です。幸い市民の皆さんの活発な生涯学習、地域学習の中で、自分たちの先人が残した文化財や地域の歴史を学びたいという欲求は大きくなっています。私たち文化財行政・教育行政に携わる者はこのような要望に応えられるよう、市民の皆さんにご理解をいただき、一体になった取り組みができるよう一層の努力をしていかなければなりません。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいたジェイティ不動産株式会社、医療法人栗山会 飯田病院をはじめ、本調査に関係された全ての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成14年3月

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰 啓

## 例 言

1. 本書は、医療法人栗山会 飯田病院によるリハビリ施設建設工事に先立つ「箕瀬遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査はジェイティ不動産株式会社から委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成13年度に本調査、整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量、空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業及び整理作業にあたり、遺跡略号をMNZとして使用し、遺跡の中心地番である2561を略号に続けて付した。
6. 本報告書では以下の略号を使用している。  
 竪穴住居址－SB 溝－SD 土坑－SK
7. 土層の色調・土性は『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
8. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により吉川・坂井が行った。
9. 本書の執筆と編集は担当調査員の協議により吉川・坂井が行い、小林正春が総括した。
10. 本書の写真について、遺構は吉川・坂井が、遺物については西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からのそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004-1番地飯田市考古資料館で保管している。

# 本文目次

序	
例言	
目次	
第1章 経過	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織	1
第4節 調査の概要	2
第2章 遺跡の環境	
第1節 自然環境	5
第2節 歴史環境	6
第3章 調査結果	
第1節 調査区の設定	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構・遺物	10
1 竪穴住居址	
①SB04	10
②SB01	10
③SB02	10
④SB03	13
⑤SB05	13
2 埋甕	13
3 溝	
①SD01	14
②SD02	14
4 土坑	
①SK01	14
②SK02	14
③SK03	14
5 遺構外出土遺物	14
第4章 まとめ	
1 縄文時代	21
2 弥生時代	21
3 平安時代	21
報告書抄録	33
奥付	34

## 挿図目次

挿図 1	遺構全体図	2
挿図 2	調査遺跡位置図	3
挿図 3	調査位置及び周辺遺跡地図	4
挿図 4	基準メッシュ図区画調査位置	8
挿図 5	基本層序	9
挿図 6	SB04	10
挿図 7	SB01	11
挿図 8	SB02	12
挿図 9	SB03・05 埋甕	13
挿図10	SD01・02 SK01~03	15
挿図11	周辺ピット図 ①	16
挿図12	周辺ピット図 ②	17
挿図13	出土遺物	18
挿図14	出土遺物	19
挿図15	出土遺物	20

## 写真図版目次

図版 1	遺跡遠景・調査区全景	23
図版 2	調査区全景・SB04	24
図版 3	SB01・入口部・カマド・炭化物出土状況	25
図版 4	SB02・カマド・遺物出土状況	26
図版 5	SB03・SB05・埋甕	27
図版 6	SD01・SD02・SK01	28
図版 7	SK02・SK03・重機作業風景	29
図版 8	基準点設置作業・作業風景	30
図版 9	空中写真撮影風景・整理作業風景・調査区現状	31
図版10	SB01・埋甕・SB02	32

# 第1章 経 過

## 第1節 調査に至るまでの経過

平成12年7月1日、ジェイティ不動産株式会社代表取締役 折居靖彦より、飯田市箕瀬町 箕瀬遺跡内における既存建物解体工事に関する埋蔵文化財発掘の届出が提出された。工事内容より立会い調査を行い、その結果用地内の一部で遺構、遺物が確認された。関係機関と協議の結果、解体工事後のリハビリ施設建設工事前に試掘調査を行うこととし、同年12月27日～28日にかけて試掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代から平安時代にかけての竪穴住居址等が確認された為開発主体者、飯田市教育委員会との保護協議を行い、次年度において建物建設予定地を中心とした発掘調査を行う事とした。

## 第2節 調査の経過

以上の経過を経て、翌年度平成13年4月2日、ジェイティ不動産株式会社代表取締役 折居靖彦と飯田市長田中秀典との間で発掘調査に関する委託契約を締結し、4月3日に現地での発掘調査に着手した。

調査は4月3日から4日にかけて重機による表土剥ぎ作業を行い、その後基準点設置作業及び作業員による遺構検出作業を開始した。竪穴住居址・土坑・溝址等を検出し、順次掘り下げて精査を行い全体及び個別の測量調査、写真撮影を実施して、同年4月16日に現地での作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業・出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測・写真撮影作業・第2原図の作成・トレース・版組等を行い、発掘調査報告書を刊行した。

## 第3節 調査組織

### 1. 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 富田 泰啓				
調査担当者	吉川 金利	坂井 勇雄			
調査員	佐々木嘉和	馬場 保之	澁谷恵美子	下平 博行	伊藤 尚志
	羽生 俊郎				
作業員	新井ゆり子	池田 幸子	伊東 裕子	井上 恵資	金井 照子
	唐沢古千代	木下 早苗	木下 玲子	熊崎三代吉	小平まなみ
	小林 千枝	斎藤 徳子	佐々木一平	佐々木真奈美	佐藤知代子
	清水 三郎	代田 和登	杉山 春樹	関島真由美	高木 純子
	竹本 常子	橘 千賀子	田中 薫	筒井千恵子	中沢 温子
	中田 恵	中平けい子	中村地香子	服部 光男	林 勢紀子
	林 ひとみ	原 昭子	樋本 宣子	平栗 陽子	福沢 育子
	牧内喜久子	牧内 八代	松下 成司	松下 博子	松本 恭子
	三浦 厚子	三浦 照夫	宮内真理子	森藤美知子	森山 律子
	吉川 悦子	吉川紀美子			



## 2. 事務局

飯田市教育委員会

教育次長 久保田裕久

生涯学習課長 中島 修 (平成13年度～)

文化財保護係長 小林 正春

文化財保護係 馬場 保之 澁谷恵美子 吉川 金利 下平 博行 伊藤 尚志

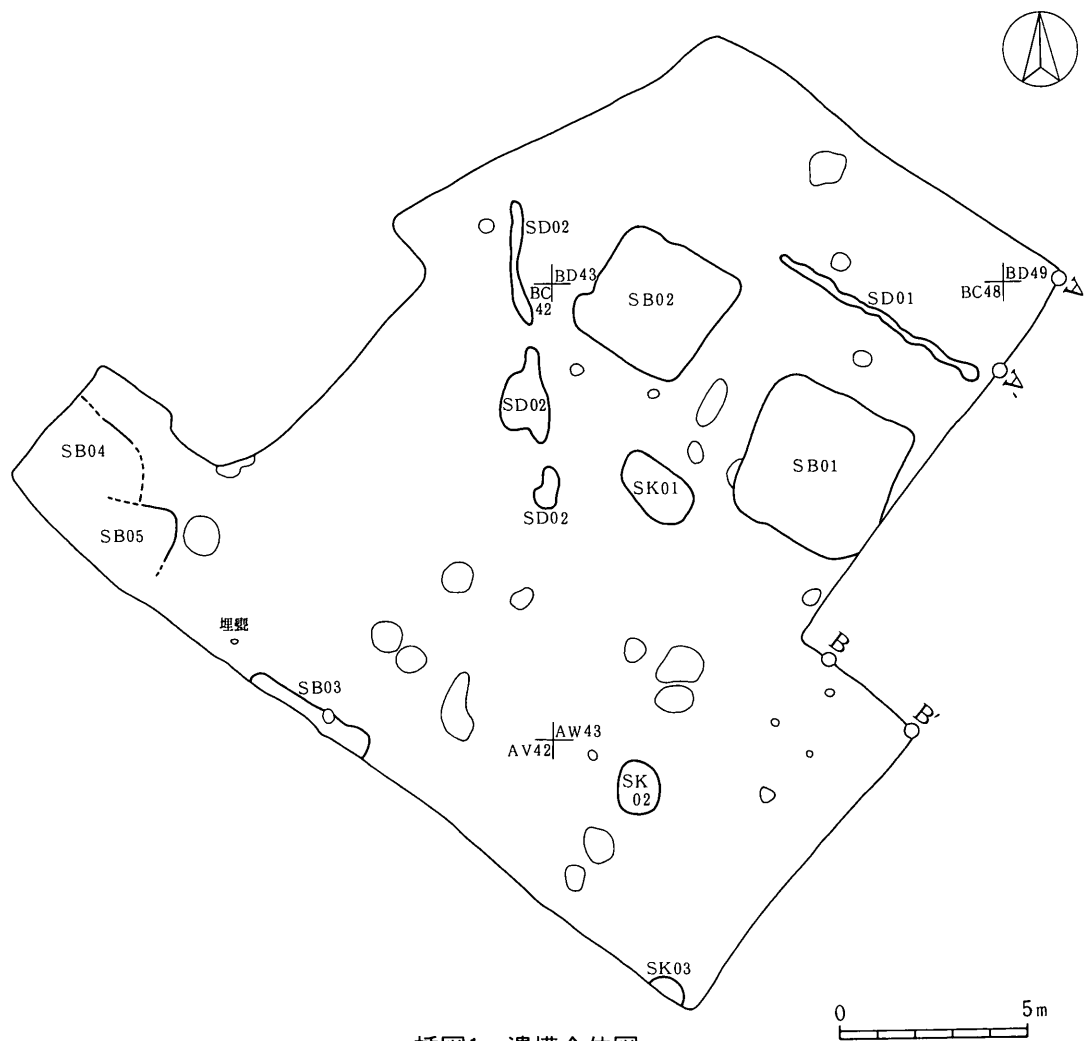
坂井 勇雄 羽生 俊郎 (平成13年度～)

学校教育課

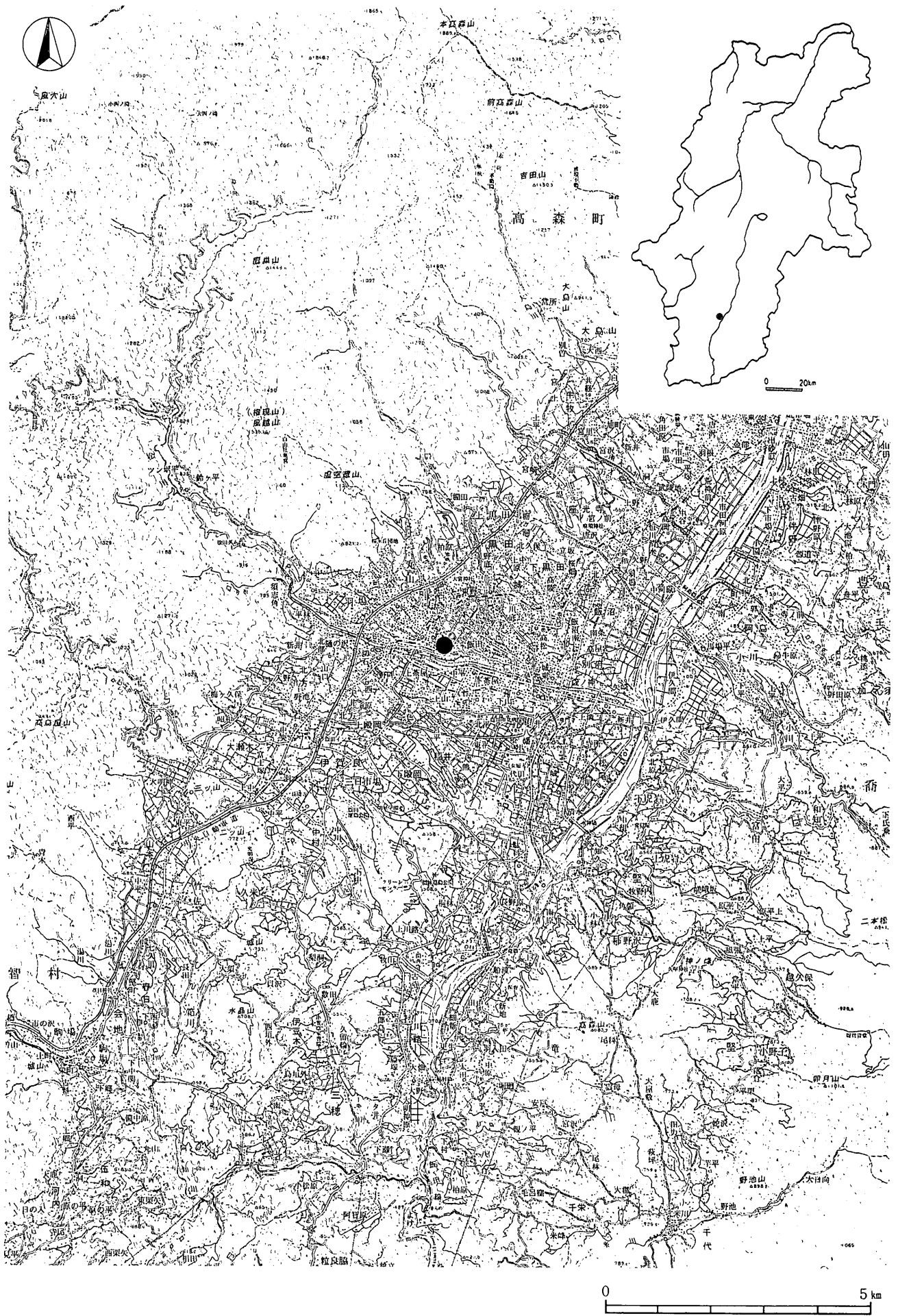
総務係 宮田 和久 (平成13年度～)

### 第4節 調査の概要

今回の調査区は飯田市箕瀬の倉庫跡地であり、試掘調査で住居址が確認された部分を中心とした360㎡が調査対象地である。確認された遺構は縄文時代中期後半の住居址1軒、平安時代の住居址4軒、弥生時代中期の埋甕1、時期不明土坑3基、時期不明溝2条であり、平安時代を中心とした集落跡である。



挿図1 遺構全体図



挿図2 調査遺跡位置図



挿図3 調査位置及び周辺遺跡地図

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

飯田市箕瀬は飯田市街地の南端に位置する。

飯田市は伊那山脈と木曾山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。当地は山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

飯田市街地が立地する場所は、南を松川により、また北側を野底川により区切られた段丘上である。この段丘上には、風越山麓から扇状地が発達し、東端の段丘端部（標高500m）から風越山麓（標高600m）までの比高差100mの間が緩やかな傾斜で一連の面となっている。

地形・地質の概観は『伝馬町遺跡』（下伊那教育会 1988）によると、「段丘は2つの礫層と、最上段に重なる火山灰層からできている。最上部の火山灰層は、飯田城二の丸跡で約3mの厚さを持つ。火山灰の供給源は御岳火山で、その新期テフラ層を主体にしたものであり、約2万年前から4万年前の地層である。火山灰層の下にある礫層が段丘礫層である。段丘礫層は花崗岩礫を主体とする礫層で、飯田松川または野底川によって運搬・堆積した礫層である。愛宕神社では3～4mの厚さを持ち、飯田城二の丸では4～5mの厚さを持つ。礫は白く新鮮で、風化が進んでいないので、崖上に突出した地層をつくっている。礫の大きさは20cm～30cm大を主とし、ときには1.5m大の巨礫も含んでいる。礫の間は粗い花崗岩質の砂によって充填されている。この礫は支流に古い扇状地を浸食していくときの礫層で、飯田市街地の開析段丘をつくったときの地層である。

飯田市街地の段丘の主体を占める礫層は段丘礫層の下にみられる。両者は不整合関係である。下位の礫層は“伊那層群”の一員で、その最上部にある“柳沢礫層”相当層である。古くから、通称『伊那層』と呼ばれている。伊那層は愛宕神社で30m余、飯田城址で40m余が露出しているものの、下限は不明であるから、飯田市付近では数10mから100mの厚さを有すると推定される。この礫層は東部の低地部でもボーリングによって数m下に存在し、松川を越えた一色・名古屋段丘に連続している。つまり10数万年より以前の中期更新世までは、飯田市街地から一色・名古屋まで一続きの扇状地が広く盆地を埋積していたのである。そのときの扇状地は天竜川に沿って、主として天竜川の堆積による礫層が広く分布していた。

伊那層は褐色を示し、花崗岩礫やホルンフェルス礫が風化し、くさり礫層となっている。チャート礫のみが堅いままで残っている。礫種は天竜川の河床礫と同じようで、赤石山地から運ばれてきた緑色岩類やチャートを含んだり、諏訪方面から供給された安山岩礫が含まれている。礫は数cm大のものを主体とし、わずかに10cmから10数cmのものを含んでいる。少ないが薄い砂層もはさまれている。

飯田市街地の段丘は、“伊那層”によって構成されている。しかし、その礫層は段丘をつくったときの礫層でなく、段丘時代より一時代前の大扇状地時代のものである。伊那谷が段丘時代にはいると、松川や野底川が扇状地を浸食して扇状地開析段丘をつくってきた。川沿いで深く掘り込み、扇状地は分断され、扇状地上も削りこまれて何段もの段差をもつ複雑な段丘地形が形成されたのである。」

このような市街地の地形の中で、箕瀬遺跡は松川を南側直下に望む段丘の縁辺部に位置しており、住

宅が密集する現在の状況からはみえないが、源長川に向かって傾斜している事が今回の調査で確認された。

## 第2節 歴史環境

飯田市街地は飯伊地方唯一の近世都市である点が大きな特徴であり、城下町から引き続く市街地化の過程の中でこれに先立つ時代の様相が不明瞭になった事もまた特徴である。これまで市街地ゆえに調査が行われる機会は少なく、昭和61年に行われた飯田市美術博物館建設に先立つ飯田城跡二の丸跡及び本丸跡の発掘調査のみであったが、近年、市街地再開発計画に伴う飯田城下町遺跡（飯田市教委 2001）、追手町小学校昇降口建替えに伴う飯田城跡の発掘など調査をする機会が増えている。これらの遺跡のほとんどは近世遺構であり、それ以前の状況はまだ断片的な事実しか得られていないが、周辺地区を含めた考古学的事実から本遺跡周辺の歴史環境を通観する。

旧石器時代については、市内では石子原遺跡、竹佐中原遺跡の調査が特筆され、他は断片的に遺物が出土している程度である。市街地においても美術博物館建設に先立つ発掘調査で細石刃核が出土したのみである。

縄文時代について、早期では湯渡（権現堂前）遺跡、風越山麓山裾部の正永寺原遺跡・押洞遺跡等で押型文土器の破片が見つかっている。中期になると正永寺原遺跡・権現堂前遺跡・押洞遺跡・中葉の住居址が確認された大門町遺跡（飯田高校考古学研究会 1975）があり、当遺跡からも住居址1軒や、土器片等の遺物が確認されている。この時期は他地域同様山麓から台地先端にいたる広範な地域に遺跡が分布するようになり遺物も多く見られる。後期、晩期については正永寺原遺跡・押洞遺跡など山麓際からの発見例が大半である。

続く水稲栽培を経済基盤とする弥生文化の下伊那への波及は縄文時代晩期終末のことであり、美濃・尾張・三河方面から東漸したものと考えられている。旧市内の代表的遺跡として、権現堂前遺跡・さつみ遺跡・羽場曙遺跡・正永寺原遺跡・古屋垣外遺跡・丸山遺跡（飯田市教委 1988）等があり、後期の遺跡が多く見られる。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期各地区に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達为背景と考えられる。方角東遺跡・羽場曙遺跡では、竪穴住居址、方形周溝墓等が調査され、散在的な集落景観が把握されている。こうした状況は、他地区の高位段丘上に立地する遺跡と共通しており、風越山の裾部や扇状地扇端部付近で発達する湧水や、小河川沿いでの水田経営が随所にあったことが予想される。

古墳時代にはこの時代の最も特徴的な事象として古墳の築造があり、上飯田地区内にも数基の古墳が存在したことが伝えられているが、現在は市街地化の進行により残存するものは木戸脇古墳・杵が塚古墳のみである。該期の集落は丸山遺跡で調査されており、相当規模の集落の存在が考えられるが、断片的に把握されているにすぎない。同様な地形を呈する伊賀良地区の場合、該期の集落遺跡として、富の平遺跡（飯田市教1996a）・三壺淵遺跡（長野県教委1973）・上の金谷遺跡（同前）・小垣外遺跡（飯田市教委1988b）・八幡面遺跡（同前）・中村中平遺跡（飯田市教委1994）・中島平遺跡（同前1977）が調査されているが、前時代よりも集落数が激減することが指摘されているし、こうした状況は上郷・座光寺地区の上段でも概ね当てはまる。旧市地区においても同様のことが想定できよう。

続く奈良・平安時代の状況についてはこれまで全く不明であったが、今回の調査において平安時代と考えられる住居址4軒が出土し、該期の集落の一端が確認された事は大きな成果であった。前述の伊賀良

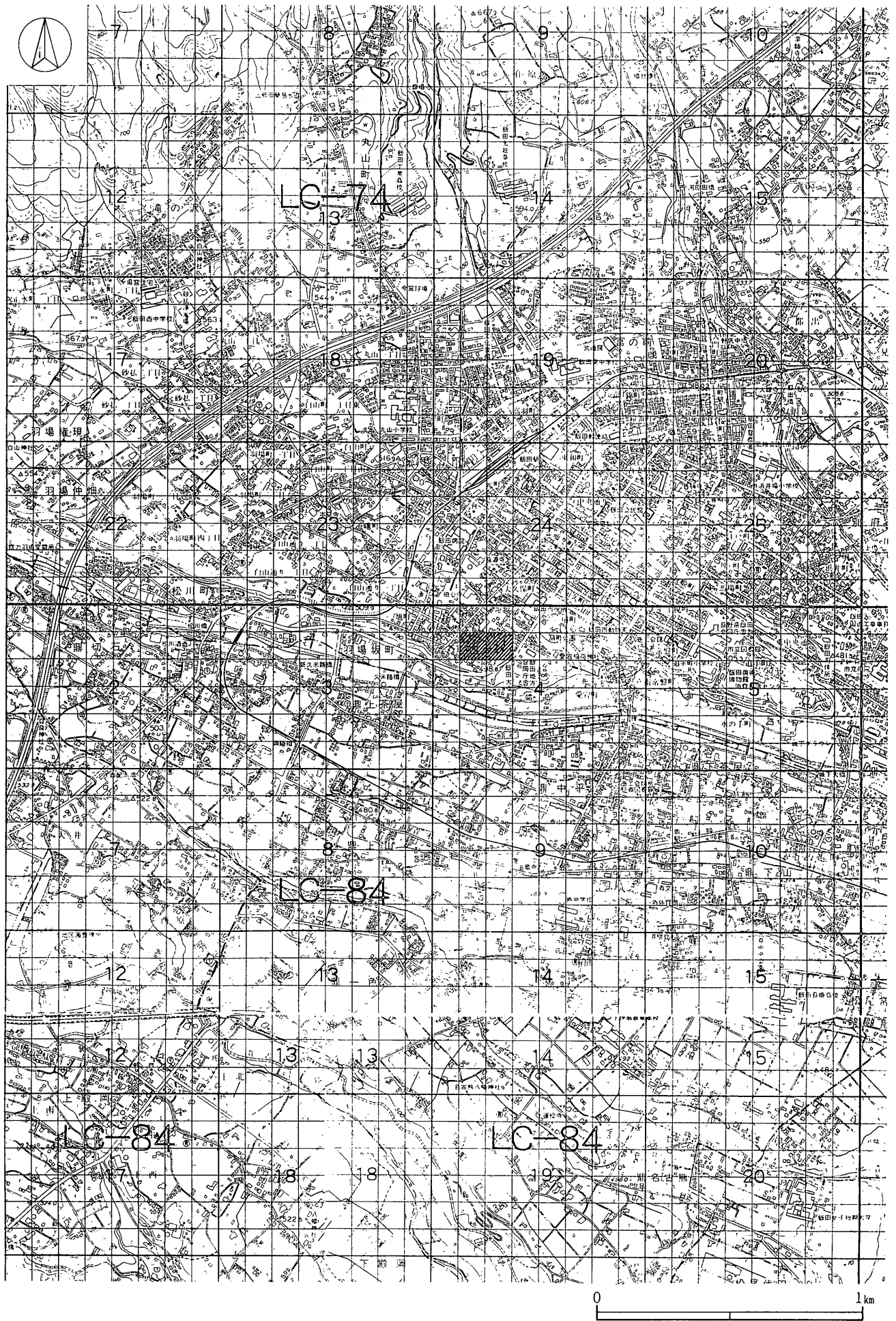
地区同様、高位段丘上の開発が進展してきた事を裏付ける結果であり、今後の調査でさらに様相が明らかになっていくであろう。

中世に至っては、それぞれの詳細な築城時期は不明ではあるが、飯田城・愛宕城・上飯田の城山・虚空蔵山頂等に山城が造られ、一定の集団による活動があったことを推し計ることができる。未報告であるが、飯田城跡の発掘調査では、近世城郭に先立つ遺構として、空堀2本と小規模な方形の竪穴が約60軒検出されている。

近世の考古学的成果として、飯田城跡関係（二の丸・本丸・出丸）の発掘、伝馬町・本町の発掘、風越窯址の調査がある。飯田城跡二の丸発掘・本丸発掘についてはいずれも未報告であるが、二の丸跡では、大通り跡・屋敷の礎石・柱穴・御用水等の遺構、陶磁器類・焼塩壺・煙管・焼物の玩具・碁石等の生活雑器、魚骨やサザエの貝殻等が見つかっている。本丸跡では、池の一部が調査されている。また、住宅建設に先立つ調査では、空堀の出丸側石垣が把握され、サヤ鉢数点が出土したことから付近に飯田藩による官窯の存在した可能性が指摘されている。平成12年度、追手町小学校の昇降口建替えに先立つ調査においても槻堀の埋立て跡が確認されている。

城下町については、伝馬町の発掘で武家屋敷の主屋の一画が調査され（下伊那教育会1988）、また本町の調査では上級商家の生活の様子が明らかになった事が特筆される。（飯田市教委2001）

風越窯址では2基の窯址が調査・確認されており、完形品こそないが、染付けの磁器・青磁・白磁があり、優品が焼かれたことを示す好資料を得ている（飯田市教委1979）。



挿図4 基準メッシュ図区画調査位置

# 第3章 調査結果

## 第1節 調査区の設定 (挿図4)

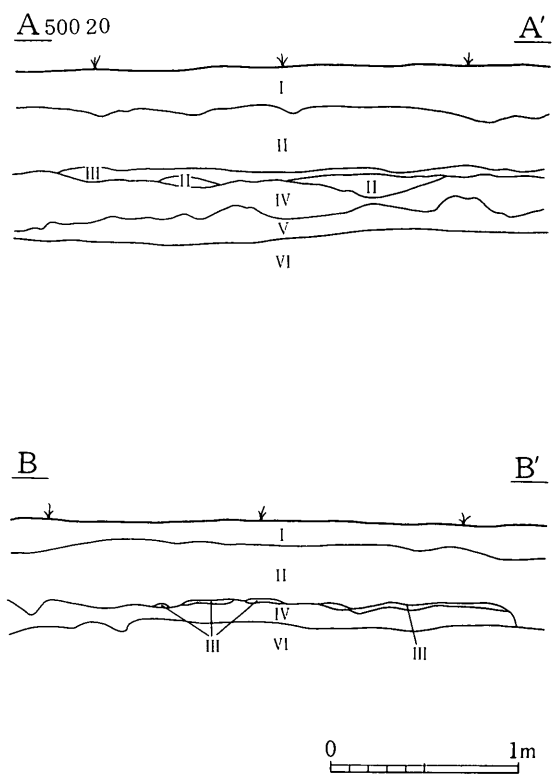
調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託した。今次調査地点は挿図4に示す地点である。

## 第2節 基本層序 (挿図5)

BC49・AW47で基本層序確認のための調査区を設けた。

I層は既存建物に関わる造成土であり、その下層II・III層で旧水田の痕跡を確認した。その下層はIV層の黒褐色土、V層の漸移層、VI層の褐色土が堆積しており、VI層の上層で遺構を確認した。

- I層 造成土
- II層 旧水田
- III層 旧水田鉄分沈殿土
- IV層 7.5YR3/1 (黒褐) LiC 粘性強 しまり弱
- V層 7.5YR4/4 (褐) HC 粘性強 しまり弱
- VI層 7.5YR4/3 (褐) HC 粘性強 しまり強



挿図5 基本層序



### 第3節 遺構・遺物

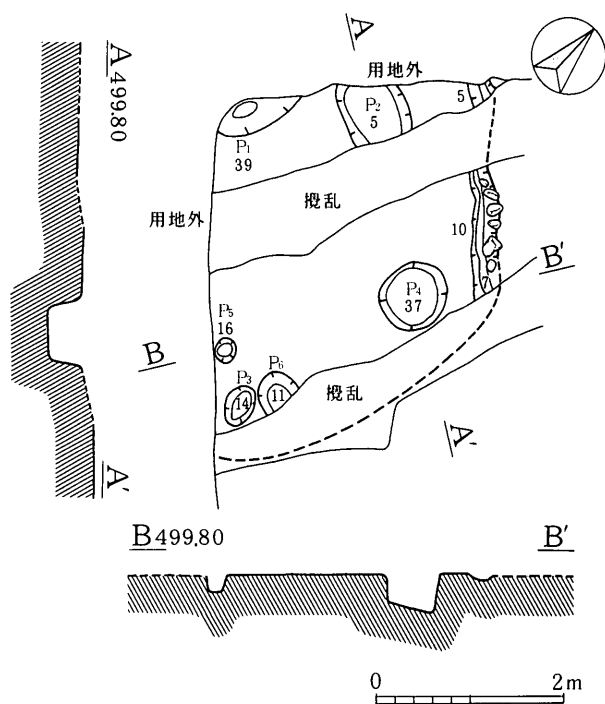
#### 1. 竪穴住居址

(縄文時代)

##### ①4号住居址 (SB04) (挿図6・13・15)

**遺構** 調査区西側隅、BA36を中心にして検出し、西側が調査区外の為全体の4分の1を調査した。SB05に切られていると思われるが、遺構部分の多くが攪乱によって壊されている為その規模、主軸等が不明である。北側の一部で周溝と思われる落ち込み、主柱穴と考えられるP4が確認された。

**遺物** 遺物の出土状態は覆土中が中心であり、遺物から縄文中期後葉である。



挿図6 SB04

(平安時代)

##### ②1号住居址 (SB01) (挿図7・13・15)

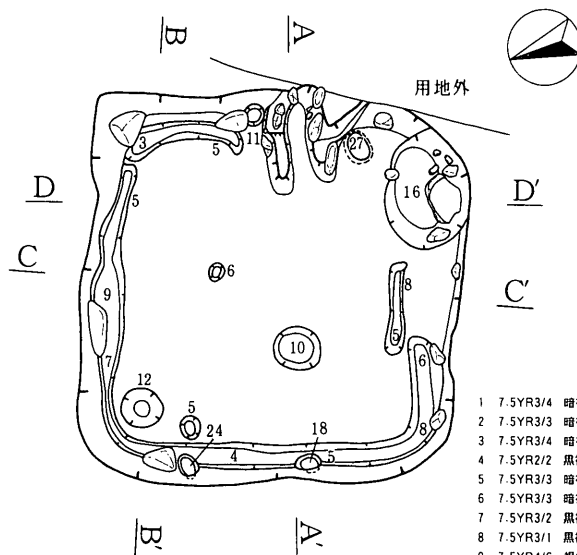
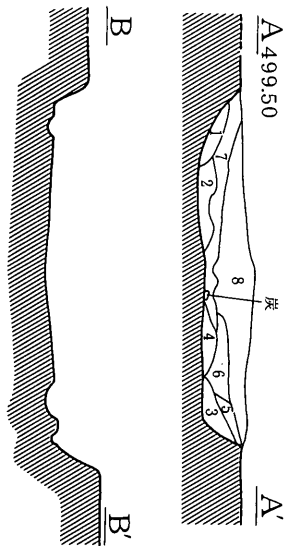
**遺構** AY46を中心にして検出し、全体を調査した。3.8×4.0の隅丸方形を呈し、主軸方位はN110°Eを示す。壁面はほぼ垂直の立ち上がりを見せ、検出面から床面までの深さは約40cmをはかる。床面は堅固な貼床であり、南西側を除いてほぼ全体に深さ約7cmの周溝が掘られている。床面上には大形の礫、住居構築材と推定される炭化物が多く堆積しており、床直上の遺物が少ない事から何らかの原因で焼かれた家と考えられる。かまどは南東側に構築されており構築石材も一部残存している。明確に主柱穴といえる穴はなく、かまどの南側隅に位置する穴が貯蔵穴と推定される。また、北西側の壁面に直径約30cmの穴が2つ確認されているが、入口部に関するものと考えられる。

**遺物** 覆土中を主体として土師器杯・甕・軟質須恵器杯・灰釉陶器碗・鉄鏟等が出土し、貯蔵穴と考えられる穴から灰釉陶器短頸壺の底部が据え置かれた状態で出土していることから年代は平安時代である。

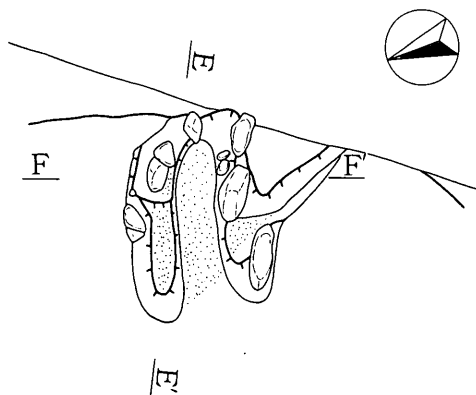
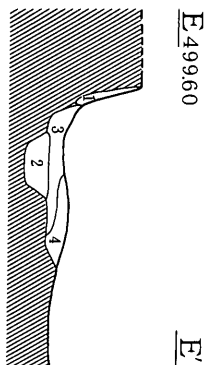
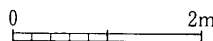
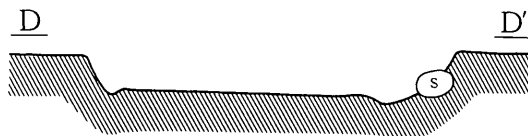
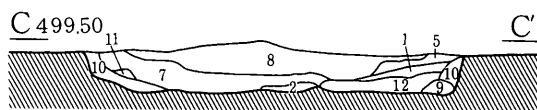
##### ③2号住居址 (SB02) (挿図8・14・15)

**遺構** BC44を中心にして検出し、全体を調査した。3.2×3.4の隅丸方形を呈し、主軸方位はN58°Wを示す。壁面はややゆるやかな立ち上がりを見せ、検出面から床面までは約20cmと浅い。床面は貼床であり、部分的に周溝と思われる掘り込みが見られる。床面上にはSB01と同様大形の礫が点在しており興味深い。かまどは北西側に構築されており、構築石材が若干確認される。明確な主柱穴はP2・3・4であり、かまどより南側に位置するP1が貯蔵穴と考えられる。

**遺物** 覆土中を主体として土師器杯・長胴甕・須恵器広口瓶等が出土し、また貯蔵穴と考えるP1よりほぼ完形の土師器杯・軟質須恵器杯が2個体出土している。遺物から年代は平安時代である。

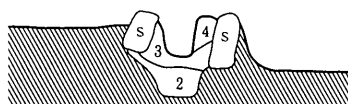


- 1 7.5YR3/4 暗褐色 SiC しまり強 粘性強 焼土含む
- 2 7.5YR3/3 暗褐色 SiC しまり弱 粘性弱 炭化物多量含む
- 3 7.5YR3/4 暗褐色 SiC しまり強 粘性強 褐色ブロック含む
- 4 7.5YR2/2 黒褐色 SiC しまり強 粘性強 炭化物含む
- 5 7.5YR3/3 暗褐色 HC しまり弱 粘性弱
- 6 7.5YR3/3 暗褐色 HC しまり強 粘性強 炭化物・褐色ブロック含む
- 7 7.5YR3/2 黒褐色 SiC しまり強 粘性強 炭化物・褐色ブロック含む
- 8 7.5YR3/1 黒褐色 CL しまり強 粘性弱
- 9 7.5YR4/6 褐色 HC しまり弱 粘性強 褐色ブロック多量含む
- 10 7.5YR4/4 褐色 HC しまり弱 粘性強
- 11 7.5YR2/1 黒色 SiC しまり弱 粘性強
- 12 7.5YR3/1 黒褐色 SiC しまり強 粘性強

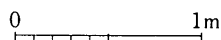


F499.60

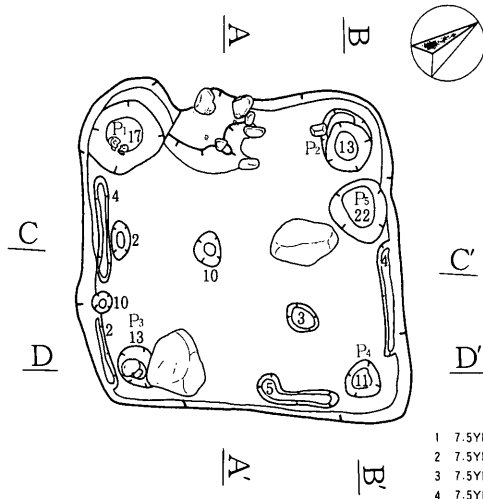
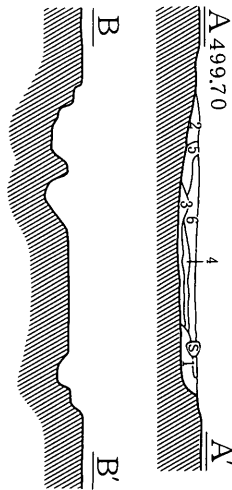
F'



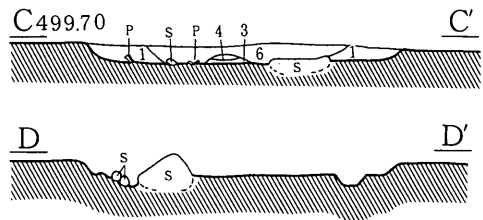
- 1 7.5YR4/4 褐色 HC しまり強 粘性弱 焼土多量含む
- 2 7.5YR3/4 暗褐色 SiC しまり強 粘性強
- 3 7.5YR3/4 暗褐色 SiC しまり強 粘性強 焼土多量含む
- 4 7.5YR4/6 褐色 SiC しまり強 粘性強 焼土・炭化物含む



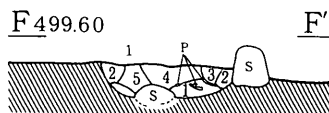
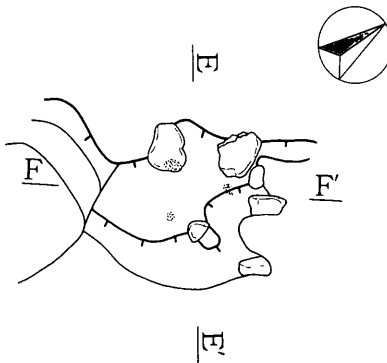
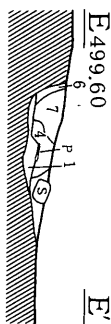
挿図7 SB01



- |   |          |      |    |      |      |          |
|---|----------|------|----|------|------|----------|
| 1 | 7.5YR3/2 | 黒褐色  | SC | しまり強 | 粘性無し |          |
| 2 | 7.5YR2/2 | 黒褐色  | SC | しまり強 | 粘性強  |          |
| 3 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | HC | しまり弱 | 粘性強  |          |
| 4 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | SL | しまり弱 | 粘性無し | 炭化物多量含む  |
| 5 | 7.5YR3/4 | 暗褐色  | SC | しまり強 | 粘性弱  | 褐色ブロック含む |
| 6 | 7.5YR3/3 | 暗褐色  | HC | しまり強 | 粘性強  | 褐色ブロック含む |



0 2m



0 1m

- |   |          |      |     |      |     |            |
|---|----------|------|-----|------|-----|------------|
| 1 | 7.5YR3/4 | 褐色   | HC  | しまり強 | 粘性弱 | 焼土多量含む     |
| 2 | 7.5YR3/4 | 暗褐色  | SIC | しまり弱 | 粘性弱 | 炭化物多量含む    |
| 3 | 7.5YR4/4 | 褐色   | SIC | しまり弱 | 粘性弱 | 焼土多量含む     |
| 4 | 7.5YR3/3 | 暗褐色  | SIC | しまり強 | 粘性弱 |            |
| 5 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | HC  | しまり強 | 粘性弱 |            |
| 6 | 7.5YR4/3 | 褐色   | HC  | しまり弱 | 粘性強 |            |
| 7 | 7.5YR3/4 | 暗褐色  | SIC | しまり強 | 粘性弱 | 焼土多量含む     |
| 8 | 7.5YR3/3 | 暗褐色  | LIC | しまり強 | 粘性弱 | 褐色ブロック多量含む |

挿図8 SB02

④3号住居址 (SB03) (挿図9・14)

**遺構** AW40を中心にして検出し、南側が調査区外の為、北側4分の1を調査した。隅丸方形と推定されるが、規模、主軸等は不明である。壁面はややゆるやかな立ち上がりを見せ、検出面から床面までは約8cmと浅い。P1、P2が主柱穴と考えられる。

**遺物** 覆土中を主体として、土師器杯等が出土している。遺物から年代は平安時代である。

⑤5号住居址 (SB05) (挿図9・14)

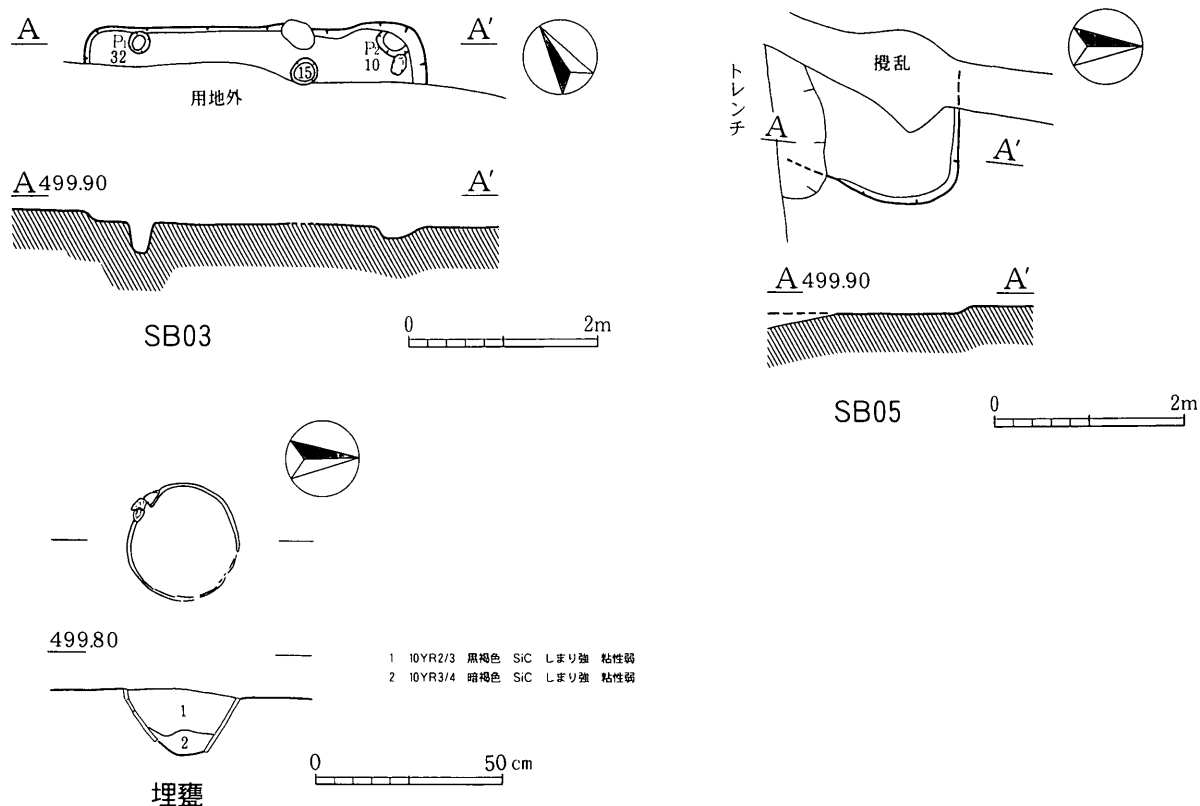
**遺構** AY37を中心にして検出したが、わずかに東側コーナー部分が確認されたのみでそのほとんどを攪乱等によって壊されていた。SB04を切ると思われるが、規模、主軸は不明である。

**遺物** 僅かに覆土中から灰釉陶器壺等が出土しており、遺物から年代は平安時代である。

2. 埋甕 (挿図9・14)

**遺構** AW39で検出した。検出時は胴部以下で底部は確認されなかった。上部は削平されており本来は胴部以上もあったと思われる。土器内覆土は別表のとおりで、焼土・灰・炭等は確認されず埋設炉ではない。周囲を精査したが本址に伴うと思われる遺構は検出されず、よって埋甕と判断した。しかし、前述した如く、上部が削平されている為住居址等の施設の可能性もある。

**遺物** 弥生時代中期後半の北原式に比定される甕である。



挿図9 SB03・05 埋甕

### 3. 溝

#### ①溝址01 (SD01) (挿図10・14)

**遺構** BC47を中心にして検出した。全長約6m、深さ約8cmで西から東へ延びている。覆土中に砂が含まれることから水が流れていたと思われるが、時期、性格とも不明である。

**遺物** 覆土中より縄文時代後期、晩期の土器片等が出土しているが、上流からの流れ込みと考えられる。

#### ②溝址02 (SD02) (挿図10・15)

**遺構** BB42を中心にして検出した。全長約8m、深さ約5cmで北から南へ延びている。時期、性格とも不明である。

**遺物** 時期がわかる遺物は確認できなかった。

### 4. 土坑

#### ①土坑01 (SK01) (挿図10)

**遺構** BA44を中心にして検出した。長径210cm・短径130cm・深さ40cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面は台形を呈する。底部には大形の自然礫が多く露出している。

**遺物** 遺物の出土はなく、時期、性格とも不明である。

#### ②土坑02 (SK02) (挿図10・14・15)

**遺構** AV44を中心にして検出した。長径140cm・短径120cm・深さ50cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面は台形を呈する。

**遺物** 覆土中より須恵器片等の遺物が確認されたが、遺構の時期を決めるものではなく、時期、性格とも不明である。

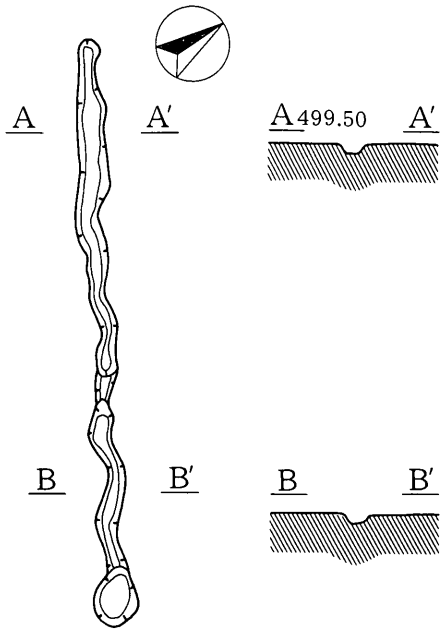
#### ③土坑03 (SK03) (挿図10・14)

**遺構** AS44を中心にして検出した。南側が調査区外であり、北側部分の2分の1を調査した。長径110cm・深さ50cmを測る。断面は台形を呈し、底部で多数の礫を確認した。

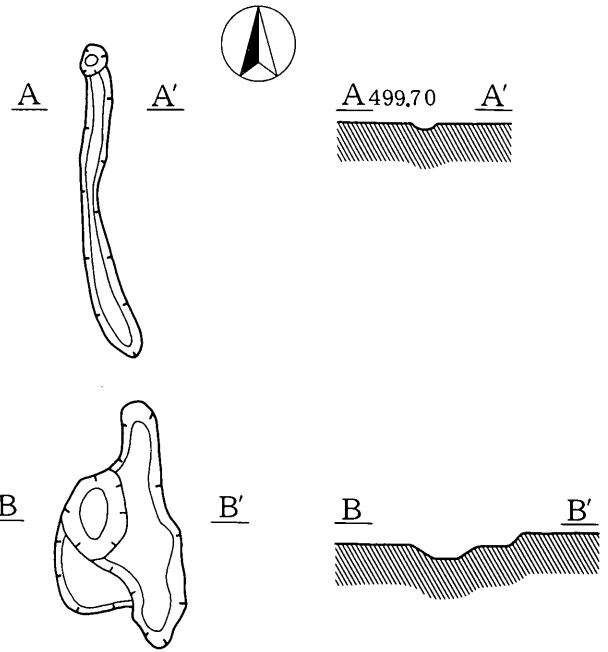
**遺物** 覆土中より土器片が数点出土しているが、時期、性格とも不明である。

### 5. 遺構外出土遺物 (挿図14)

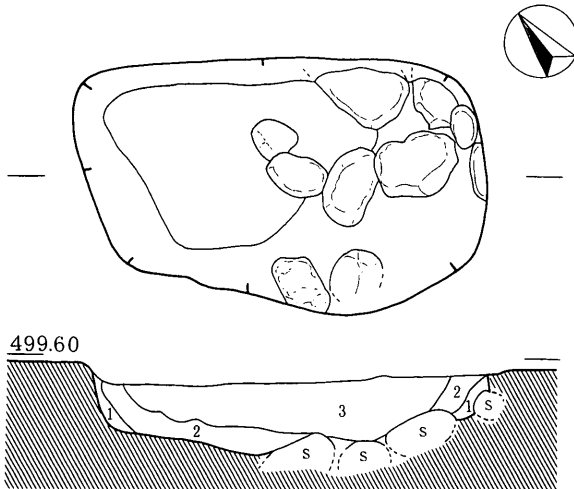
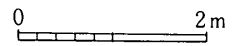
縄文時代から平安時代にかけての土器片が多数出土している。その中でも当遺跡の最古相を示す縄文時代早期の押型文土器が破片資料で1点確認されており、周辺に該期の遺構の存在が予想される。



SD01

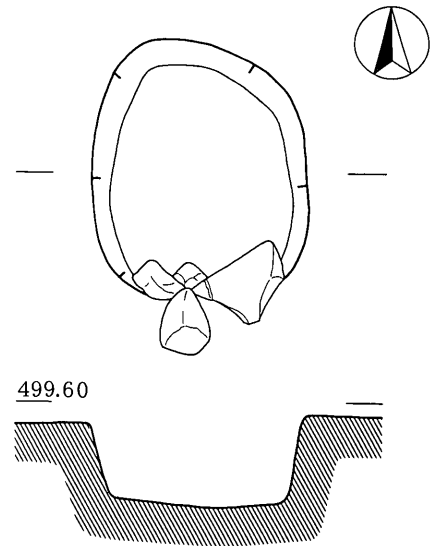


SD02

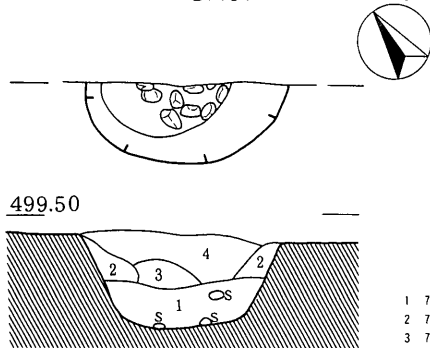
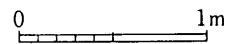


SK01

- 1 7.5YR4/4 褐色 HC しまり強 粘性強
- 2 7.5YR3/2 黒褐色 HC しまり強 粘性強 褐色ブロック含む
- 3 7.5YR2/2 黒褐色 HC しまり強 粘性強



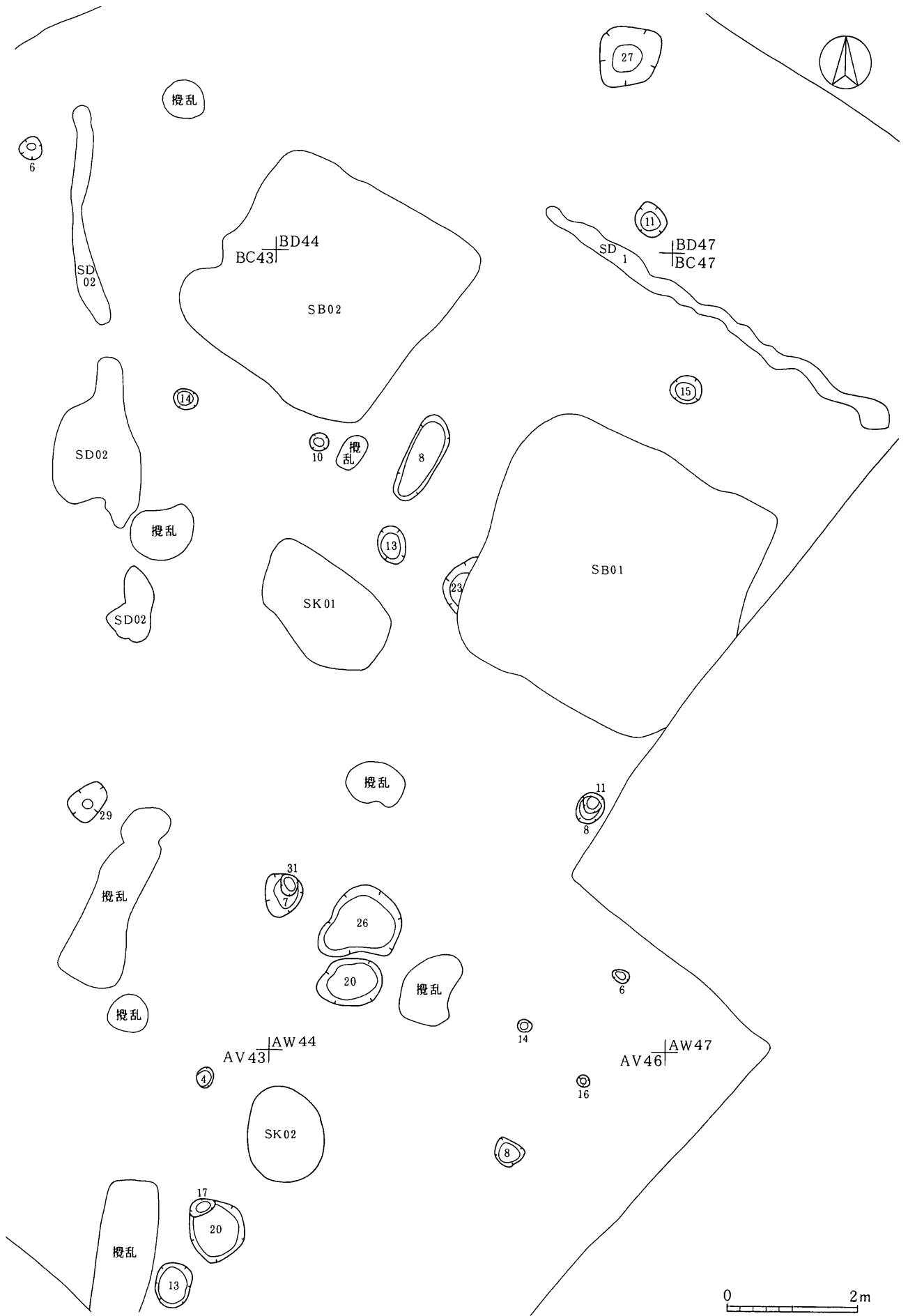
SK02



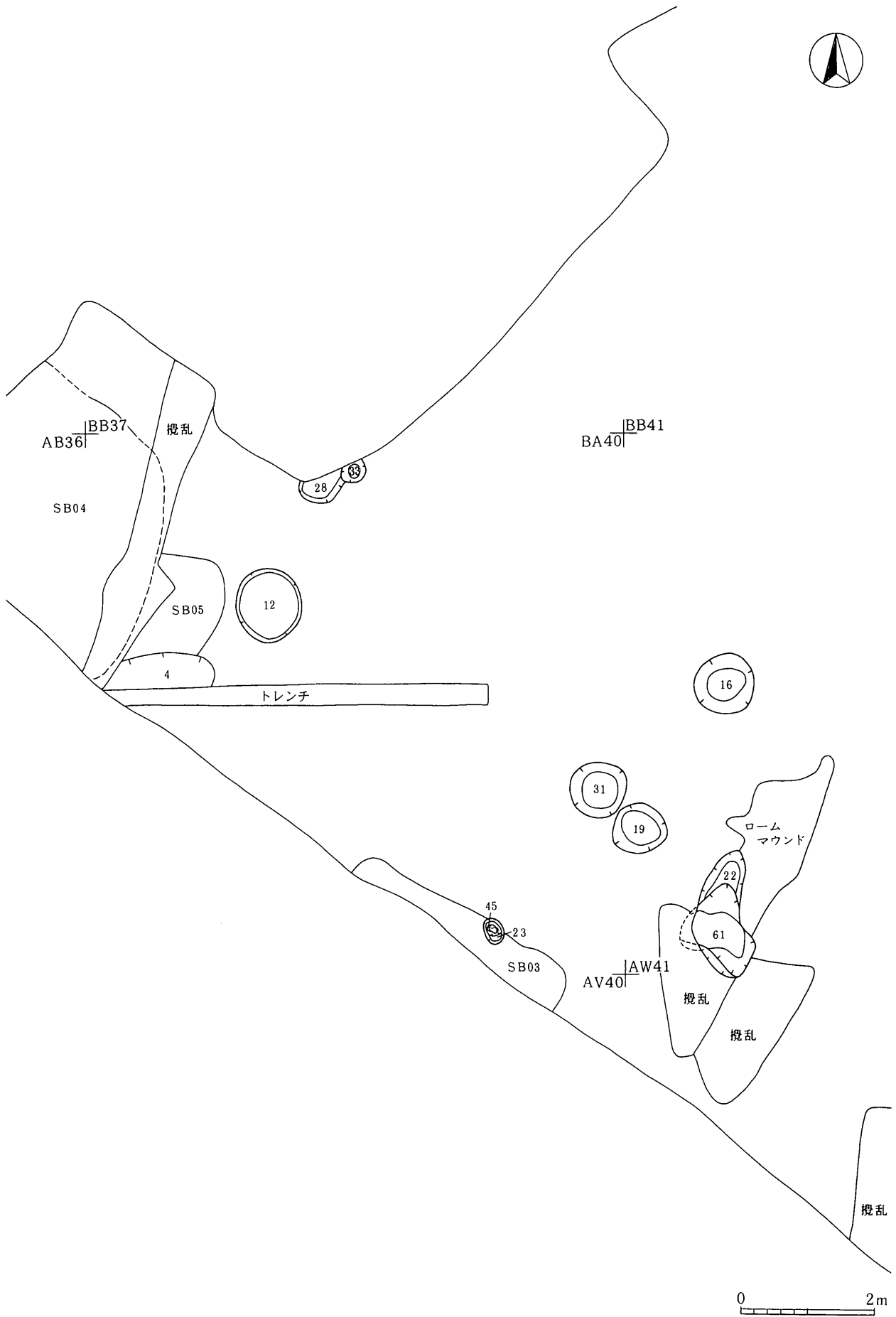
SK03

- 1 7.5YR3/4 暗褐色 HC しまり強 粘性強 炭化物含む
- 2 7.5YR4/6 褐色 HC しまり強 粘性強 褐色ブロック多量含む
- 3 7.5YR3/2 暗褐色 HC しまり強 粘性強 褐色ブロック含む
- 4 7.5YR3/2 黒褐色 HC しまり強 粘性強

挿図10 SD01・02 SK01~03

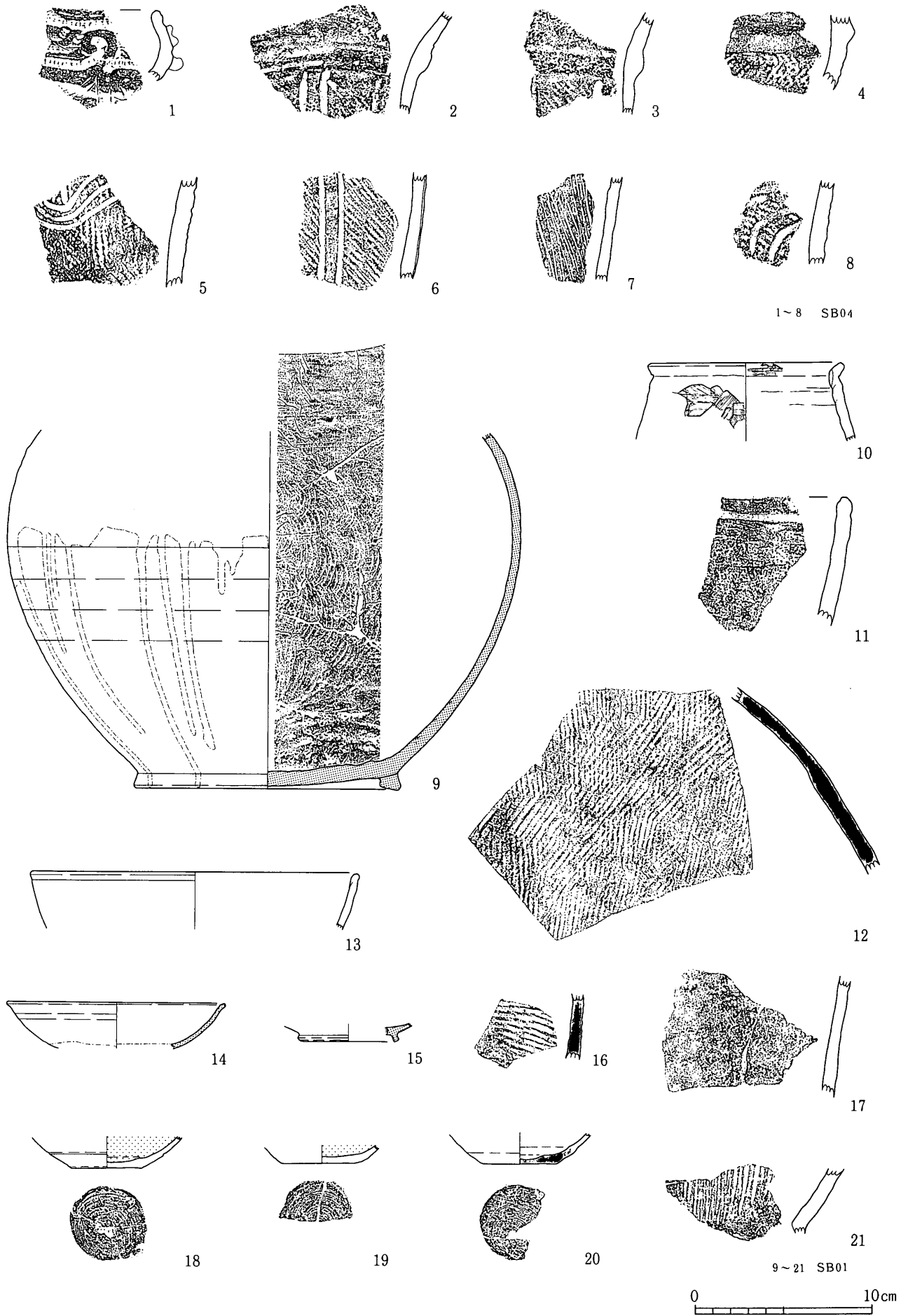


挿図11 周辺ピット図 ①

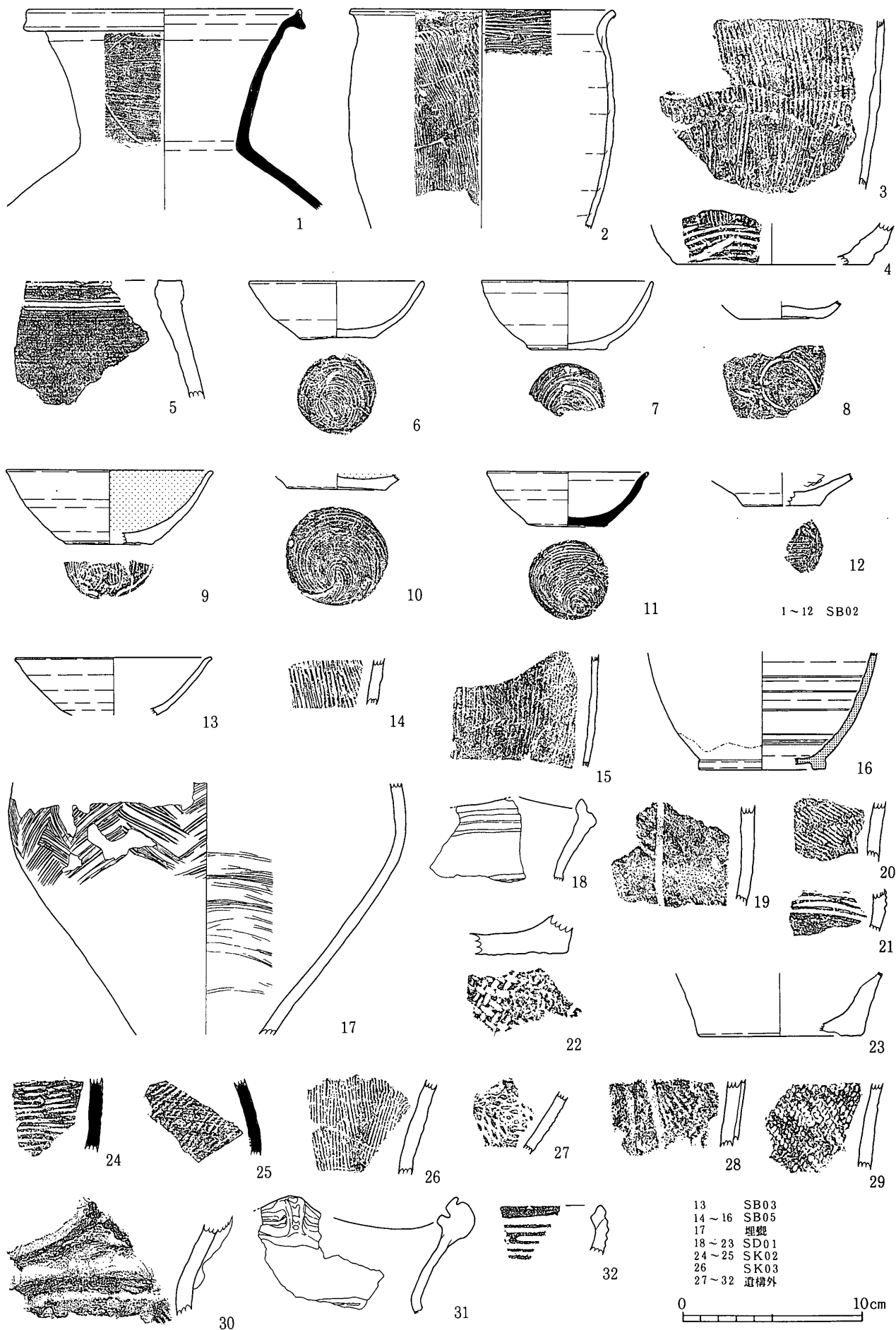


挿図12 周辺ピット図 ②





挿図13 出土遺物



挿図14 出土遺物

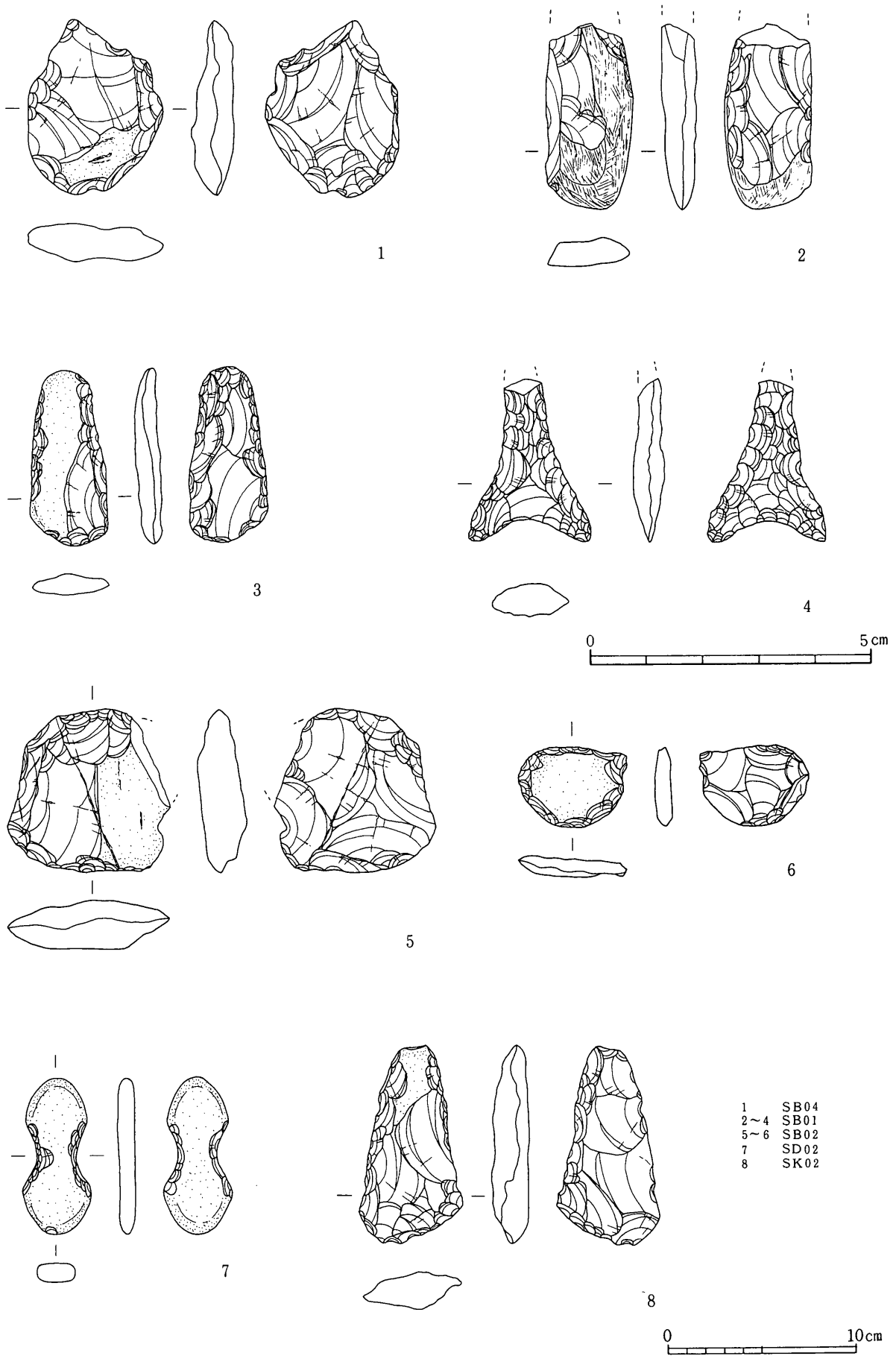


插图15 出土遗物

## 第4章 まとめ

### 1. 縄文時代

当遺跡からは、一部ではあるが住居址1軒をはじめとして当時代の遺構・遺物が若干確認されている。中でも最古相を示すのが早期の押型文土器であり、楕円文をもつ破片資料1点（挿図14-27）が出土している。これは遺構外出土遺物であり、上流部からの流れ込み遺物と考えられる。その他、中期後葉の遺構として4号住居址が西側隅で確認されており、該期の遺物も周辺部の遺構覆土などから多く出土している。後・晩期の遺構については確認されていないが、溝址の覆土内や、遺構外出土遺物として破片資料が数点確認されている。

今回の調査区からは4号住居址以外当時代の遺構は確認されていないが、早期から晩期にかけての遺物が出土しており、特に調査区西側部で多く確認されている。遺物の多くが流れ込み遺物である事を考えると、それらに伴う遺構は調査区北西部に広がるものと推測され今後の調査結果を待ちたい。

### 2. 弥生時代

該期の遺構は中期後半北原式土器の埋甕である。遺構確認時すでに上層部が削平されており、胴部以下下部のみが確認され底部を欠いていた。出土状態から埋甕としたが、上記のような検出状況の為遺構の性格は不明である。飯沼丹保遺跡から時期はやや古相を示すものの似たような出土状況の北原式土器の甕が土器棺墓として確認されており、その他の類例の増加を待って検討していきたい。

周辺の同時期の遺跡を見てみると、北原遺跡（高森町）・恒川遺跡群・飯沼丹保遺跡・伊久間原遺跡（喬木村）があり、天竜川東岸の低位段丘Ⅰに位置する伊久間原遺跡を除いてそのほとんどが天竜川西岸地区の低位段丘Ⅱに立地している。水田による稲作や畑作を考えての集落立地と考えられるが、当遺跡はそれらより高位の段丘面である低位段丘Ⅰに立地している。これまでこの段丘面上で該期の遺跡が確認された例はなく、今回の調査における大きな成果の一つと言える。

僅かな遺構ではあるがそれが持つ意味は大きく、その性格・立地を今後考えていく上で貴重な資料である。

### 3. 平安時代

今回の調査で古墳・奈良時代の遺構は確認されなかったが、平安時代の住居址が4軒確認されており当遺跡の中心的な時代といえる。

1号・2号・3号・5号住居址が該期の遺構であるが、時期はそれぞれの出土遺物から9世紀後半と考えられる。遺構の配置、主軸方位から見るとSB01が他の住居址と比較して若干時期がずれる可能性があるが、ほぼ9世紀後半の集落跡と考えられる。

9世紀後半という時代は当地方において全般的に遺構が多い時代であり、鼎地区猿小場遺跡・松尾地区妙前遺跡・同清水遺跡・同水城遺跡・座光寺地区恒川遺跡群・同新井原遺跡・上郷地区堂垣外遺跡・伊

賀良地区小垣外、辻垣外遺跡・山本地区高野遺跡・龍江地区細新遺跡など市内全域で確認されている。今回の調査でこれまで不明とされていた市街地においても該期の集落が確認されたことにより9世紀中～後半が当地方の平安時代のピークであることがあらためて確認されたといえる。

以上、時代別に概略をまとめてみたが、狭い範囲の限られた遺構の為多くの事実を語る事ができなかった。担当者の力不足で遺憾に思う。ただ、日頃調査をする機会がほとんど無い市街地において本調査を実施出来たことは貴重であり、これまで不明であった縄文から平安時代までの様相が少ないながらも確認できた事は一つの成果である。

今回の調査を含め近年、街の再開発事業に伴う「飯田城下町遺跡」(飯田市教委 2000)の発掘調査や追手町小学校内の「飯田城跡」の発掘調査など街中における調査が少しずつ増えてきている。まだまだ断片的な調査ではあるが、これからも地道な文化財保護活動が必要であろう。また、日頃歩きなれた街並みの下にもいろいろな歴史が眠っている事を多くの人たちに知ってもらえるよう、その成果を生かしていく事もこれからの大きな課題である。

最後に、平安時代の遺物に対して駒ヶ根市立赤穂小学校教諭小平和夫氏を中心に、飯田市誌編集委員会原始古代史部会奈良・平安時代班の皆様それぞれご教示賜りました。また、文化財保護の本旨にご理解をいただき、調査の実施にあたって多大なるご高配・ご協力をいただいたジェイティ不動産株式会社、医療法人栗山会 飯田病院に対し、記して感謝致します。

#### 《 引用・参考文献 》

- 下伊那地質誌編集委員会編 1976 『下伊那の地質解説』  
飯田市教育委員会 1976 『清水遺跡』  
飯田市教育委員会 1980 『猿小場遺跡』  
飯田市教育委員会 1988 『伝馬町遺跡』  
(財)長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編全1巻(4)遺構・遺物  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『総集編』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4  
飯田市教育委員会 1991 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』  
飯田市教育委員会 1991 『清水遺跡』  
下伊那誌編集会 1991 『下伊那史』第1巻  
上郷町教育委員会 1993 『丹保遺跡』  
飯田市教育委員会 1994 『堂垣外・橋爪・藪上・長橋遺跡』  
飯田市教育委員会 1998 『細新遺跡Ⅱ』  
飯田市教育委員会 2000 『飯田城下町遺跡』  
山下誠一 2000 「飯田盆地における弥生集落の動向－発掘された竪穴住居址を基にして－」  
『飯田市美術博物館研究紀要 第10号』  
飯田市教育委員会 2001 『妙前遺跡』



遺跡遠景（南から）



調査区全景（北から）



調査区全景



SB04



SB01



入口部

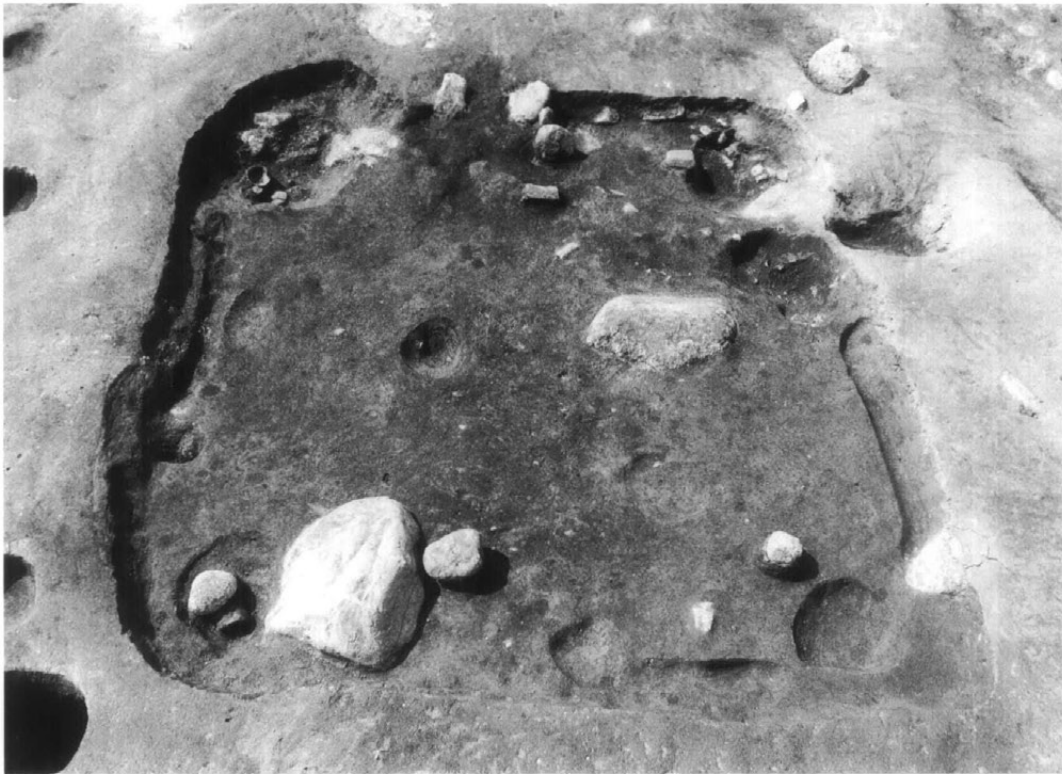


カマド



炭化物出土状況





SB02



カマド



遺物出土状況



SB03



SB05



埋壘



SD01



SD02



SK01



SK02



SK03



重機作業風景



基準点設置作業



作業風景



作業風景



空中写真撮影風景



整理作業風景



調査区現状



SB01



埋甕



SB02

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みのぜいせき							
書名	箕瀬遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	吉川金利 坂井勇雄							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 Tel 0265-53-4545							
発行年月日	2002年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 名所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村遺跡番号						
みのぜ 箕瀬遺跡	いいだしみのぜ 飯田市箕瀬	20205		35度 30分 47秒	137度 49分 12秒	2001年 4月3日 ～ 4月16日	360㎡	リハビリ施 設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
箕瀬遺跡	集落址	縄文時代 弥生時代 平安時代 時期不明	竪穴住居址 1軒 埋甕 1 竪穴住居址 4軒 溝2条・土坑3基	縄文土器 縄文石器 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器	弥生時代中期後半北 原式土器の埋甕  平安時代(9世紀後半) の集落址			



---

## 箕 瀨 遺 跡

2002年3月15日 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯 田 市 教 育 委 員 会

印 刷 杉 本 印 刷 株 式 会 社

---

